

3. 調査レポート 火災と教会ーダバオ市の海サマ人の生活空間の変容と持続ー

著者	青山 和佳
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	288(149) -281(156)
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008479/

火災と教会

——ダバオ市の海サマ人の生活空間の変容と持続——

青山和佳^{*}

はじめに

本稿の目的は、2016年1月25日から同年2月5日⁽¹⁾におこなった、南部フィリピン、ミンダナオ島のダバオ市の海サマ人居住区における火災とそれに続く住民の移転にともなう生活空間の創出にかんする現地調査について予備的な報告をすることである。調査地への通いと住み込みの組み合わせによる民族誌的調査という方法を取り、住民とその支援者から協力をえて、参与観察とインタビューをおこなった。

予め、本稿のもつ制約を述べておこう。ひとつは、調査対象をペンテコステ派キリスト教徒の海サマ人に限定したことである。筆者は従来、ダバオ市沿岸部の低所得者居住区に集住するサマ語系住民の「全体」を調査対象としてきた。しかし、その地区が2014年に焼失し、住民が複数の場所に移転したため、かつてのように「物質的空間あるいは地理的空間としての全体」の把握が困難になった。もうひとつは、使用する資料をフィールドノーツに限定し、本稿はその素描（コーディング準備）にとどまることである。これは、時間の制約による⁽²⁾。

以下でいう「海サマ人」(Sama Dilaut)とは、現代のダバオ市の文脈において広く「バジャウ」(Badjao, Bajau)と自称・他称されるサマ語系のエスニック集団のうち、みずからを海サマ人と同定する人びとを指す。そのなかには、本人・家族・親族について過去における船上生活の記憶が明らかな人もいれば、そうでない人も含まれる。また、「生活空間」については、「人びとが日常生活を営んでおり、物理的に把握可能な環境の範囲」と暫定的かつ緩やかに定義しておく。「空間」という概念はさまざまな形容詞との組み合わせにより、それ自体がさまざまな比喩となり、どこまでも拡張可能である⁽³⁾。本稿においても、「日常生活」を見る視角におうじて異なる「～空間」が立ち

* 東京大学東洋文化研究所；The Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 / wakaaoayama@gmail.com

(1) 昨年度(2015年度)の報告書においては、その締め切りと本稿に記した現地調査の時期のずれにより未報告の内容である。なお本年度の調査も本稿の締め切り以降に実施する予定。

(2) 「調査地が埋め込まれている文脈」を理解するために、上述の調査期間において市政府やバランガイ(フィリピンの最小行政単位)に統計等を請求したが、それらがリリースされたのは、同年3月以降、別予算(筆者を研究者とする科学研究費補助金・基盤(C)26360001)で調査地を再訪したときであった。これらの資料を織り込みながら、漸次構造化法により民族誌を作成するという意味において、「時間の制約」と述べたつもりである。

(3) 2000年以降における人類学的な「空間」概念の議論について、西井涼子・田辺繁治編(2006)『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社、Setha M. Low and Denise Lawrence-Zúñiga eds. 2003. The anthropology of apace and place: locating culture, Blackwellなどを参照した。ほかに、本稿における「素描」という手法については、建築家の岸健太氏との対話(2016.6.21)からヒントを頂いた。Kenta Kishi. 2011. "Meta-Kampong: The Third Concept of Sustainability" (Plenary Speech, International Conference on Creative Industry 2011) など。

上がっていると学術的にはみなせる場面もあるだろうけれども、以下では既存概念の援用を検討する準備として、筆者の体感した「現場」からの素描を試みたい。

3. 調査レポート

1 2014年4月の火災と海サマ人ペンテコステ教徒の移転⁽⁴⁾

2014年4月4日、ダバオ市のイスラベリヤで火災が発生した。火災は5時間続き、3つのバラングイに及んだ。この火災は国家災害リスク軽減管理評議会（NDDRM）に報告されるとともに、市政府が2つのバラングイについて損害甚大と認定し、災害非常事態宣言を発令した。被災者の多くはビサヤ人などの平地民キリスト教徒、マラナオ人などの内陸系ムスリム諸集団であったが、ほかにルマド（啓典宗教に改宗しなかった先住民）やその他の文化的少数者が存在した。翌日の地元新聞によれば、被災した約2000家族には「バジャウ」⁽⁵⁾の家族200も含まれており、地元政府は「バジャウ」にたいしてのみマコンド公園を避難所として指定した⁽⁶⁾。このことは、筆者の目を引いた。なぜなら、それまで「バジャウ」はその社会経済的な困窮状態にもかかわらず、地方自治体、市民社会組織（キリスト教宣教関係を除く）からさほど支援を得ていなかったからである。

2014年4月11日に現地入りした⁽⁷⁾筆者が見たものは、イスラベリヤにおける主要なサマ人居住区が焼き尽くされて僅かなセメントのみが残るといった状況と、そこに暮らしていた住民の大半がマコンド公園で避難生活を始めていることだった。この公園において市政府やバラングイから一定の見舞金や支援物資が分配されたのち、食糧・衣類・薬などの必需品を届け、仮設住宅や水道などインフラ整備を担っていたのは、米国や韓国出身の福音派キリスト教宣教師たちと市内に拠点をもつローカルの宣教師たちであった⁽⁸⁾。その後、まもなく市政府とバラングイの協力のもとで、元の居住地での生活再建を前提に「元の居住者（世帯主）」のリスト作成とそれにもとづく宅地の配分が実施された。しかし、すべての住民が元の居住地に戻ったわけではなかった。顕著な変化のひとつは、2014年11月1日から同11日まで筆者がダバオ市を再訪⁽⁹⁾したおりに、海サマ人のうち2000年頃からペンテコステ派キリスト教を受容していた住民が「消えて」いたことだった。

2 移転先における3つの海サマ人ペンテコステ派教会

2014年11月に筆者がビサヤ人調査助手とともに目視で数えたところ、元のサマ人居住区には約200軒の家屋が建てられ、1軒あたりに5名暮らすとすればおよそ1000名の住民がそこに暮らすと推定された⁽¹⁰⁾。その数においては火災前の住民がもどってきたように見えたが、実際に歩き回ってみると、1997年以来この地区を定点観測してきた筆者にとっても調査助手にとっても「見知らぬ」海サマ人住民が増えていた。生産年齢人口にあたる人びとが日中に賭博や飲酒をする様子から、こ

(4) プライバシー保護の観点から、人名、地名の多くは仮名とした。

(5) 市内におけるサマ語を話す人びとの混合体の一般的な名称で、実体としては陸サマ人と海サマ人の両方を含む。

(6) ほかのエスニシティに属する被災者については、バラングイの指示にしたがいながらも複数ある避難所から行き先を選択することができた。

(7) 緊急時だったため、所属先の個人研究費により渡航。

(8) 詳細は下記の論文に公表済み。Aoyama, Waka. "What Do Disasters Reveal about the Society?: A Case Study of the Fire That Hit the Sama-Bajau Community in Davao City." Presented at the PSA (Philippine Studies Association), The National Museum of the Philippines, November 2014.

(9) 科学研究費補助金・基盤B（海外）25300017（研究代表者：東洋大学・長津一史）によって実施。

(10) 後日、2016年5月に入手したダバオ市の社会サービス福祉開発局（CSSWD）の統計と照らしたところ、推定住民数はほぼこの通りであった。しかし、火災前の住民登録や統計がないため、それらの住民が「火災前にそこに住んでいた住民」かどうかについては、「元住民同士」の相互証言やキリスト教会牧師が作成したリストに頼ったうえで宅地の配分がなされていた。

の地区のサマ人のなかでも経済的な生活指標は最底水準と推測された。直接および間接にたずねたところ、それらの人びとはミンダナオ島北西部のイリガン州から火災後に流入してきたということだった。一方で、前述したように、火災前にそこに暮らしており、ペンテコステ派キリスト教会と海サマ人牧師を中心に見えやすい「コミュニティ」を形成していたおよそ80~100世帯ほどがこの居住区からは消えていた。これらの人びとは、ほかのバランガイ（Barangay B）におけるダカラ地区に集団で、つまり「教会ごと」、自発的に転出していたのであった。

2016年1月、調査に先立ち、バランガイBのバランガイ長のトラマル氏（ビサヤ人男性、カトリック）を訪問した。このバランガイには102ものブロック（区画）があり、それぞれにブロック長が配置されていたが、うち4名のみがムスリムと告げられた。つまり、このバランガイではキリスト教人口が多数派なのだった。これは火災前に海サマ人キリスト教徒が暮らしていたバランガイCではムスリム人口が多数派であり、とくにマラナオがバランガイ長とバランガイ評議員の大半を占めていたこととは対照的である⁽¹¹⁾。トラマル氏はダカラ地区には4名の海サマ人牧師が存在するといいい、うち3名は筆者が以前より知っている名前であった。ただし、組織形態は変化していた。すなわち、火災前の調査地においてその3名は同じ教会に属していた。1名は主任牧師であり、ほかの2名は彼を支える牧師としての役割を担っていたが、ダカラ地区においては3名それぞれが主任牧師として別個の独立教会を率いる形となっていたのである。

筆者がダカラ地区に海サマ人を訪ね、そこに寝泊まりすると告げたところ、バランガイ関係者（ビサヤ人）からは「本気なのか」と尋ねられた。治安というよりも「（ビサヤ人を基準としたときに想像される）生活様式の違い」に筆者が耐えうるかということを懸念してのことである。これは逆にいえば、バランガイ関係者は海サマ人の居住を認めながらも、その居住区を訪問することはあまりなく（滞在してみたら実際にそうであった）、その生活の実態をよく知らないということの表れでもあった。このようにバランガイから海サマ人への社会文化的な干渉も交渉はとぼしく見える一方で、政治的な意味で「住民」として把握されていることはまちがいがなかった。それはたとえば、2016年5月、ダバオ市長が出馬した大統領選挙の投票においてバランガイ関係者からの「サポート」、つまり各教会に援助物資が届けられ、サンプルバロットが示されたことに表れている。また、それぞれの牧師は沿岸部の治安維持を期待され、うち1名はバランガイ・コーディネイターとして無線ラジオを支給されていた。

ダカラ地区はダバオ川河口からダバオ湾沿岸に広がっている。2016年1月時点において、海サマ人ペンテコステ派キリスト教会およびその信徒を中心とする集落が3つ確認できた。かりにそれぞれの教会A、教会B、教会Cとよぼう。紙幅の都合から、それぞれの教会の特徴を表1にまとめて示す。なお、その析出地はすべてサンボアンガであり、とくに「イスラーム集落」タルクサガイやリオ・ホンドを中心とする。シアシ系サマと推定されるものの、本人たちに「サマ・シアシか」とたずねた場合はダバオ市の文脈における「サマ・ラミヌサ」との弁別のためか否定される。かわりに「サマ・サンボアンガ」、「サマ・ダバオ」などという答えを得ることもある。

3 移転先における生活空間のたえざる創出——変容と持続

ここでは紙幅の都合と資料の制約から、筆者が住み込み調査をおこなった教会Aを中心とする集落に着目し、その生活空間を素描しておこう。表1に示したように、教会B、教会Cとくらべた場合の教会Aの特徴は、調査時点において恒常的な支援を行う宣教師が存在しなかったことである。

(11) ミンダナオ（スルーを含む）地域は全国平均に比してムスリム人口比率が高いことで知られるが、ダバオ市においてはキリスト教人口が多数派であり、ムスリム諸集団は少数派である。

表1 ダカラ地区の海サマ人ペンテコステ派教会の特徴

	教会A	教会B	教会C
主任牧師	ジョン 最初に改宗	ボン ジョンの兄	ルーク ジョンとボンのイトコ
本格的な 移転時期	火災後	火災前2008年頃	火災後
推定住居数	15	35	35
土地使用権 購入費用の出処*	教会用：宣教師 住居用：自力**	教会用：宣教師 住宅用：宣教師	教会用：宣教師 住宅用：自力**
建築費用の出処	教会用：宣教師 住居用：自力	教会用：宣教師 住居用：自力	教会用：宣教師 住居用：自力
主たる支援者	常時の支援者なし スポット的に米国系、 韓国系宣教師	ビサヤ系宣教師 地元のキリスト教系大学	韓国系宣教師 ビサヤ系宣教師 ローカルNGO ローカルFBO***
宣教師やNGO, FBO による生業支援	なし	未確認	あり (いったんは衰退した 漁業活動を「とりかえ した」ように見える)

出所：現地調査の結果にもとづき、筆者作成。

注*：政府所有地だが非公式な「地主」が存在し、使用料の支払いにより居住許可を得る。

注**：質屋、マネーレンダー（「トルコ」と呼ばれる印僑系）の利用、寄付などを含む。

注***：Faith-Based Organizationsの略で、市民社会組織のうち特定の宗教団体を基盤とするものをさす。ローカルNGOと同様に、ローカルFBOもその資金調達は国際援助機関、外国政府、北の市民社会組織に頼ることが多い。

つまり、外部からの資源調達において少額、不定期、予測不可能であった。ただし、ジョン牧師はまだサンボアンガに居住していたときにキリスト教を受容し、調査対象のなかでは最初の海サマ人牧師となり、火災前のイスラベリヤにおいて外国人宣教師、ローカル宣教師の双方からさまざまな訓練や資源を得たという経歴において抜きん出ている。逆にいえば、それが教会Aの「独立性」の源泉となっているともいえよう⁽¹²⁾ただし、以下でとりあげる生活空間の様相は、ある程度、教会B、教会Cを中心とする集落とも共通するものであると考えてよい。

(1) 集落内の建物の配置、身体を使い方と服装、自然環境

まず、牧師の自宅は、沿岸ではなく陸側に通ずる入り口に近い、外部から訪れる宣教師やバイブルスクールの教師などが立ち寄りやすい位置にある。この事例では教会も同様の立地にある。教会はペンテコステ派らしく聖霊、および信徒が生き生きと動けるようにがらんとした空間であり、前方に小さな演台、電子ピアノとラウドスピーカー、天井にカラフルな布の飾り、扇風機、グリニッ

(12) 火災後、支援に訪れる宣教師の数および援助物資の量が増えたとき、もとの海サマ人教会が内部にかかえていた各牧師とその家族・親族同士の資源分配をめぐる静かな対立が表面化し、3つの教会への分裂に至ったと推測される。また、数名のローカル宣教師側への個別インタビューにおいて、教会Bと教会Cの主任牧師は「協力的で、支援物資を独り占めしない」のにたいし、教会Aの主任牧師は「頭が固い、支援物資を独り占めする」という意見をきかされた。これは裏を返せば、教会Aの主任牧師はその牧師としての経験により、「くれるものではなく欲しいものをもらおう」という交渉力発揮の意欲が相対的に強いために、相手から扱いにくいと判断されたという解釈も可能であろう。

ジ標準時に設定された壁時計⁽¹³⁾などのみがある。ここで日曜日の午前と水曜日の晩に礼拝が行われる。

教会と牧師自宅の後方、いいかえれば海岸にむかって信徒たちの住居が建てられている。これらの住居は、近隣のビサヤ人住民の住居とくらべると明らかに「バジャウ」と外部者から見て取れる様式をそなえており、イスラベリヤ居住時と同じように杭上家屋である。ただし、家屋同士はもはや橋状の通路で接続されてない。また、大半の家屋は満潮時も完全に陸上となる場所に建てられている。見た目上、2階建となっている家屋もあり、その場合、1階部分は炊事、食事、沐浴、洗濯、休憩、日常的な社交などに使われ、2階部分は衣類などを入れたスツケースその他の容器や耐久消費財（テレビ、カラオケなど）が置かれるとともに夜間は身づくろい、家族の団欒、就寝に使われる。壁には竹のストリップを編んだアマカンと呼ばれる素材、床は竹を簀状にした素材かココナツツ材、屋根は亜鉛めっき銅板かニッパである。建築費用の調達がむずかしいときは、各種の廃材も利用される。

こうした家屋の様式は、おのずと地面にしゃがんだり、床にすわったり、階段を昇降したりしやすい服装の維持につながっている。集落内にいるときは柔らかな布地で締めつけないデザインの服装を好み、マロン（筒状の布）などを使うことは年齢や性別にかかわらず見られる。一般に、男性については古着の短パンやシャツを購入して着用していることが多いのにたいし、女性についてはインドネシア製（おそらくジョグジャカルタ産）のプリント・バティックを新品の布地としてサンボアンガなどからきて一時滞在中の海サマ人から購入し、それをゆったりとしたパンツ、ブラウス、スカートなどに仕立てることが多い。このスタイルは本人たちも「バジャウ」のものであると筆者に勧めるものであるとともに、海サマ人以外のエスニシティである市民が彼女たちを街で見たときに「バジャウ」であると認識するマーカーのひとつとなっている。

火災直前の元居住地では、宗教施設増加、人口増加、政府による埋め立ての実施により、隙間のない土地利用となっており、1990年代末まではあった地区中心の公共的な空間や沿岸部で漁船などを止める空間もしだいに埋めつくされていった。同時に、排泄物やごみの処理にたいする行政サービスの不足もあり、さまざまな汚物がつねに地区全体に集積し、とくに干潮時には汚臭を放つ事態となっていた。これにたいして、新しい集落においては海サマ人の住民すべて（その多くが血縁・姻戚関係である）が日常的に使える広場のような空間があり、その先に海岸線がひらけている。バランガイが建てた公衆トイレ2ヶ所4個室もあり、かならずしも住民がそこを常に使っているとはいえないものの、集落内の地面にごみの蓄積は見られない。また、住民が建材として木を伐採しつくしたと言われるイスラベリヤにたいして、ダカラにはココナツを始めとする緑が多く、この集落では木陰に家屋を建てることもできる。これらを総合すれば、「フレスコ」（住民の表現）つまり爽やかな風通しのよい場所ということになる⁽¹⁴⁾。

(13) キリスト教受容は、海サマ人に新しい「空間」のほかに新しい「時間」ももたらした可能性がある。ひとつは終末に直線的に向かう抽象的な軸（過去→現在→未来）であり、もうひとつは礼拝の開始と終了という大まかなタイムラインという具体的な軸である。牧師のなかには説教で「プラン」（計画）という未来志向な言葉をつかうようになった。信徒からも「ただ同じところに座っているのはよくない」（変わらなければ）という言葉を引きようになり、筆者が2010年に実施した「住民の社会的地位にかんする主観的な評価基準」において「高い社会的地位」の基準として顕れた。こうした時間感覚の変容については、ピエール・ブルデューの『資本主義とハビトゥス——アルジェリアの矛盾』（原山哲訳、藤原書店、1993年）などが参考になると考えているが、別の機会にあらためて論じる。

(14) 海サマ人牧師たちによれば、「ステージ」となる常設のセメント台があればさらによいという。結婚式などのイベントは野外に仮設したステージにブルーシートの屋根という形のをみかけるが、しばしばその資材をバランガイから借りている状態だった。

(2) 日常会話と音楽にみる使用言語と「公共圏」との距離

3. 調査レポート

こうした目にみえる景観にくわえて、サウンドスケープという観点からも素描するならば、ここはサマ語に満ちた空間であった。住民同士の日常会話や教会での礼拝にサマ語が用いられるというだけでなく、集落全体にサマ語の歌が大音響で流れていることも少なくない。これらのなかにはサンボアンガなどで調達してきた音源も含まれるけれども、筆者の短い滞在中にもっとも頻繁に流されていたもののなかには、住民自身の結婚式における踊りの場面においてウェディング・シンガーが即興的に歌ったものを録音したというものが含まれていた。そうした独自の録音は個人が所有する携帯電話を使ったものであり、個人で楽しんだり、ときには幼い子どもをあやすためのオモチャとして使われたりすることもあった。

また携帯電話についていえば、それはインターネット接続というよりも（Wi-Fi環境ではないし、識字率も低い）、日常的に家族や親族との連絡に使われていた。連絡相手はダバオ市外に暮らすことも多い。たとえばジョン牧師の同居家族（妻、長男夫妻、3女とその男児1歳）に限ってみても、ミンダナオ地域では牧師夫妻の析出地であるサンボアンガ市（キョウダイや親戚が暮らす）、タウィタウィ州ボンガオ（長男の妻の出身地）、スルー州ラミヌサ（2女の夫の出身地で2女夫妻が暮らす）、ビサヤ諸島ではセブ（長女の夫が一時滞在中）、ルソン島では「マニラ」（実際にはバタングス州で親戚の女性が暮らす）などと頻繁に連絡していた。横でききかじっていた限りでは、会話の内容は冠婚葬祭などの社交儀礼の連絡などよりもむしろおしゃべりを通じた日常的な安否確認のようなものが多かった。もちろん、サマ語がもちいられる。

サウンドスケープには、ほかに集落が寝静まっていく時間帯に静かに、しかし律動をもって耳にとどく波の音や、明け方をつけるペットの鶏の鳴き声というものもある。その一方で、ダバオ市内のビサヤ系住民（ミドルクラス）の生活空間とくらべたときに、この集落では格段に、国語であるフリピノ語（タガログ語）、地域共通語であるビサヤ語、そして公用語のひとつである英語を耳にすることが少ない。夜、タガログ語のテレビドラマを見る住民もわずかにいるし、米国カルフォルニア出身の宣教師やローカル宣教師がもちこんだ英語やタガログ語のクリスチャン・ソングが大音響で集落に流されることもあるけれども、それらはいずれも政治的な意味での公共圏への参加につながっているかという観点からは疑問がのこる。この先、学校教育を継続的に受ける子どもたちが増えれば変化する可能性もあるものの、調査時点においてこの海サマ人は「二重公共圏」⁽¹⁵⁾のうち貧困層が形成するとされる圏のほうにも包摂されていないように見えた。

(3) 地理的移動の範囲と社会的ネットワーク

この集落の人びとが外にでていくのはおもにふたつのパターンがある。ひとつは、ダバオ市および周辺地域にでかけ、サマ人以外のエスニック集団を相手に経済活動を行う場合である。こうした経済活動のうち主要なものとして、日々の必需品（キャッサバ、米、魚、野菜、調味料、木炭など）の調達（集落内には海サマ人経営の零細な雑貨店がひとつあるのみゆえ、バランガイ内のビサヤ人経営の雑貨店や市内の公設市場などで買い物をする）と生業活動（おもに古着行商、古靴行商、真珠行商）が挙げられる。後者については、ダバオ市における文化的なマイノリティ集団であるムスリム（マラナオ、タウスグ、マギンダナオなど）やチャイニーズが海上交易を通じて国際商品としての古着、古靴、真珠をマレーシアやシンガポールを中継しながら、日本、韓国、そして中国市場とやりとりしている点で興味深い。このエスニック・エコノミーについては、一部が非公式性（イ

(15) 「二重公共圏」については、日下渉、2013、『反市民の政治学——フィリピン民主主義と道徳』法政大学出版局を参照のこと。

ンフォーマリティ)のみならず非合法性(イリーガリティ)を含む活動であると推察されるなど資料収集の制約もあるため、稿をあらためて追究できる範囲で追究していきたい。

もうひとつの移動パターンは、冠婚葬祭などの社会儀礼のほか、墓参り、ハリラヤのお祭り⁽¹⁶⁾、休暇、仕事などさまざまな機会の探索などを理由に、サンボアング・スルー方面、ビサヤ諸島の諸都市、ルソン島のマニラ首都圏やその近郊の諸州に暮らす海サマ人(多くの場合、親戚と呼ばれる)を頼って出かけていくことである。それは数週間の短いこともあれば、1年以上の長期に渡ることもある。筆者が1990年代末に実施した世帯調査では、ひとつの海サマ人世帯のなかに、ダバオ市内居住地にとどまるローカルコアの構成員と地域間の移動を繰り返す構成員がふくまれており、その結果、世帯の形態がつねに変化しつづけるということが観察された。しかしながら、2000年頃以降におけるペンテコステ派キリスト教の受容、2014年における火災以降の移転と教会を中心とする集落の形成(3集落とも土地所有権の獲得にこだわっている)というふたつの大きな変化を経た現在、集落の住民がもつ潜在的な移動空間(地域的な意味での範囲)とそれを支える社会的ネットワークについてはあらためての調査が必要と考える。

なお、筆者はダカラを訪問するようになって間もないころ、「交通アクセスのよくないところだなあ、遠い」と感じていた。これは元の居住地であるイスラベリヤがハイウェイから徒歩数分でいける立地にあり、チャイナタウン(さまざまな中国製雑貨を扱う商店や安価な物品の揃う百貨店が集積)、リサダ通り(古着卸売商が集積)、アグダオ公設市場、までも歩いていけたからである。これにたいして、ダカラはハイウェイから「モーター」とよばれる乗り合い自動三輪車に片道運賃7ペソ(2016年7月16日レートで約16円)に乗り、10分以上はかかる。人力三輪車(トライシクル)を借り上げた場合、助手とふたりで片道40ペソ~50ペソ(同90円~112円)かかった。米1キロ40ペソ、キャッサバ1袋13ペソ(同29円)を念頭におくと、この交通費は海サマ人にとって安いとはいえないのではないか。

しかし、この疑念は、筆者が教会Aの集落に滞在したときに、海サマ人住民の「船」と「海」の利用の仕方をみたときに緩んだ。全員ではないが、男性で真珠を売る者たちは市内のササおよびラン方面やマティーナ・アブラヤ方面のビーチ・リゾートでその土地所有者やリゾート経営者の許可をえて、営業場所を確保していることがある。これらの地域はダカラから陸路でジープニー(小型の乗り合いバスのようなもの)とモーターを乗り継いでいくと片道だけで1人あたりの運賃が40ペソほどにもなるだけではなく、時間もかかる。自己所有するエンジン付き船に数名で乗り、ガソリン代をシェアしたほうが、よほど効率的なのだった。本格的に漁労活動する者は減ったにせよ、漁場ならぬ、行商という「生業基盤」の場所と居住地との位置関係がここでは考量されている⁽¹⁷⁾。

おわりに——現代の都市空間を生きる海サマ人をどう理解したらよいのか

本稿では、2016年1月25日から同年2月5日という短いフィールドワークで作成したノートにもとづき、ダバオ市の海サマ人居住区における火災とそれに続く住民の移転にともなう生活空間の創出にかんして素描をおこなった。そこから抽象化や概念化をすすめるにはまだ資料も少なく、分析の構造化も足りないことを承知のうえで、仮説を提起するとすれば、ひとつは、本事例にみる海サ

(16) この集落の海サマ人はキリスト教徒となったものの、析出地において近隣のムスリム集団から影響を受けていたり、あるいは結婚相手がムスリムの陸サマ人だったりすることから、断食は行わないものの断食明けの祭りに参加することがある。

(17) ほかに、海岸線が「遊び」に果たす役割も見逃せない。女性たちが海風に触れながら船に腰かけておしゃべりしたり、子どもたちが水浴びしたりすることに加え、若い海サマ人の男性たちが船を走らせて繰り返し競争して楽しむ姿、そしてそれを面白そうに見る住民たちの姿をしばしば目撃した。

マ人の居住地移転と生活空間の創出は、より善き生を求めて利用可能な諸資源や機会をめぐってなされるのではないかと、いうものである。従来の研究において、サマ人のサンゴ礁域への集住の理由として、しばしば生態的環境への適応などが指摘されてきた。しかし、近年、長津一史は、生態的環境への適応という仮説に加えて、社会史的な観点から見ると、むしろ経済的価値の高いこうした海産物を求めてサマ人が移動を繰り返した結果ではないかという仮説を提出している⁽¹⁸⁾。筆者が調査を実施してきたダバオ市において海サマ人はもはや海産物ばかりを求めていないにせよ、都市市場経済という社会を生き抜くために価値のある諸資源や機会を見出していると言えるのではないかと。

さいごに付け加えておかなければならないのは、本稿では調査時点における収集資料の制約から扱うことができなかったけれども、2016年3月以降の現地調査によって火災前にくらべて政府による海サマ人住民の生活状況の把握が進んでいるということである。このなかにはナショナルレベルである社会福祉開発省（Department of Social Welfare and Development, DSWD）による条件付き所得移転プロジェクト（通称4Ps）の受益者としての海サマ人の把握というものもあるが、ダバオ市開発計画全体における住民の空間的な再配置という政策的な観点から介入と管理の度合いを強めているという見方ができるものもある。たとえば、ダバオ市計画開発局（City Planning and Development Office, CPDO）において市内の「バジャウ」住民のリスト化が行われている一方で、火災前居住地を含む沿岸地域において「メガ・ハーバー・プロジェクト」という大規模な開発計画が進行中である。2016年6月、ロドリゴ・ドゥテルテ新大統領（過去において計22年間ダバオ市長を務めた）と開発業者代表のピクトル・ソンコ氏の間でジョイントベンチャー協定が締結されており（Sun Star Davao 06.24.2016）、これが実現されるためにはサマ語系住民を含む沿岸部住民のリロケーションが行われることになる。しかし一方で、本稿でのべたように当局が海サマ人人口の「正確な把握」を図り統計にまとめたとしても、小集団として分裂したり、家族や個人で移動したりすることがむしろ日常／常態であるため、その「正確さ」にはいまのところ限界はあろう。

ダバオ市開発計画の全体や個別プロジェクトがどのように展開していくか海サマ人住民にとっても筆者自身にとっても読み切れないけれども、本事例にもとづいて民族誌的論文を作成する際にはその文脈として織り込むことが重要なことはいまでもない。そのときに、筆者が取り組んでいきたい課題は、つぎの3点である。第1点は、ダバオ市に移住し、ペンテコステ派キリスト教徒として教会を建て集落をつくり、火災を契機に集落移転と分裂をするなど、つねに変容しながらも一定の自律的空間を創出し、維持してきた海サマ人のひとびとが、政治経済および社会文化的な意味でどのように「ホスト社会」と折り合いをつけてきたのか、客観データと主観的評価からより深く分析すること。第2点は、よりマクロ的な観点から、第二次世界大戦後のダバオ市の開発政策とその実践において、とくに20世紀末からのミンダナオ地域経済のハブとしてのインフラの充実とそれによる物流の質量（とくにコンテナによる海上輸送）の変化が、物質的空間としてのダバオ市をどのように変化させたかということ、海サマ人の暮らしを埋め込むための文脈としておさえること。最後の点は、インドネシア、マレーシア、フィリピンという3つの国民国家にまたがる海サマ人にかんする先行研究や「東南アジア海域世界」という世界観に立って提案されてきた「海民のプロトタイプ」や「地域の個性」に照らしたとき、現代のダバオ市を生きるこれらの人びとの生き方をどのように位置づけ、理解すればよいか検討すること、である。これらについて、2017年以降も独自に継続する現地調査や文献調査によっていねいに探索していきたい。

(18) 長津一史, 2008, 「サマ・バジャウの人口分布に関する覚書—スラウェシ周辺域を中心に」『アジア遊学』113: 92-102を参照のこと。